

## 1. 信仰に生きるキリストの弟子の養成

主の弟子は状況に左右されず聖霊に聞き従い、神を信じ人を信じて人々の救いと解放をもたらす。十字架に死んで神と共に生きるとは、自分と人々の罪からくる咎を覚悟し信仰と希望と愛とを持って福音の祝福の中に生きることである。キリストの弟子の養成こそ教会の使命である。

## 2. 真理と祈りと讚美に満ちた信仰生活の指導

聖書の教え、真理は人を自由にする。祈りは問題や悩みを解決し、神の御心を確認する。讚美は癒しと喜びと力を与える。教会はそれらを教え指導し、互いの交わりの中で模範を造り出していく。

## 3. キリストを頭として愛によって結び合わされた共同体の形成

教会には多種多様な人々が神によってこの世から召し出されてくる。この信者を整え、神への奉仕という使命を果たすように導くには、キリストの弟子として十字架を負い主に従う指導者層が確立されなければならない。整えられ愛し合い一致した教会こそ神の栄光が現され成長する。

## 4. 隣人に対する愛に基づいた執り成しと伝道の実践

神を愛する人は人をも愛し、行いを伴う信仰を持つ。真理を知らず罪と咎によって苦しんでいる人々を愛し、執り成し、福音を伝えることによってこそクリスチャンは成長し、祝福される。

## 5. 地域と社会に貢献する魅力的な教会員の歩みと家族形成

教会と教会員の活動・事業・啓発運動を展開し、社会に影響を与えながら、同時に愛し合う家族を形成し、接する人々に福音を現していくことが、日本のリバイバルに必要であると私たちは信じる。

# 今週の聖書

出 12:5 あなたがたの羊は、傷のない一歳の雄でなければならない。それを子羊かやぎのうちから取らなければならない。

12:6 あなたがたは、この月の十四日まで、それをよく見守る。そしてイスラエルの会衆の集会全体は夕暮れにそれを屠り、

12:7 その血を取り、羊を食べる家々の二本の門柱と鴨居に塗らなければならない。

12:8 そして、その夜、その肉を食べる。それを火で焼いて、種なしパンと苦菜を添えて食べなければならない。

12:9 生のままで、または、水に入れて煮て食べてはならない。その頭も足も内臓も火で焼かななければならない。

12:10 それを朝まで残してはならない。朝まで残ったものは燃やさなければならない。

12:11 あなたがたは、次のようにしてそれを食べなければならない。腰の帯を固く締め、足に履き物をはき、手に杖を持って、急いで食べる。これは【主】への過越のいけにえである。

12:12 その夜、わたしはエジプトの地を巡り、人から家畜に至るまで、エジプトの地のすべての長子を打ち、また、エジプトのすべての神々にさばきを下す。わたしは【主】である。

12:13 その血は、あなたがたがいる家の上で、あなたがたのためにしるしとなる。わたしはその血を見て、あなたがたのところを過ぎ越す。わたしがエジプトの地を打つとき、滅ぼす者のわざわいは、あなたがたには起こらない。

12:14 この日は、あなたがたにとって記念となる。あなたがたはその日を【主】への祭りとして祝い、代々守るべき永遠の掟として、これを祝わなければならない。

Exo12:5 'Your lamb shall be without blemish, a male of the first year. You may take it from the sheep or from the goats.

12:6 'Now you shall keep it until the fourteenth day of the same month. Then the whole assembly of the congregation of Israel shall kill it at twilight.

12:7 'And they shall take some of the blood and put it on the two doorposts and on the lintel of the houses where they eat it.

12:8 'Then they shall eat the flesh on that night; roasted in fire, with unleavened bread and with bitter herbs they shall eat it.

12:9 'Do not eat it raw, nor boiled at all with water, but roasted in fire-its head with its legs and its entrails.

12:10 'You shall let none of it remain until morning, and what remains of it until morning you shall burn with fire.

12:11 'And thus you shall eat it: with a belt on your waist, your sandals on your feet, and your staff in your hand. So you shall eat it in haste. It is the Lord's Passover.

12:12 'For I will pass through the land of Egypt on that night, and will strike all the firstborn in the land of Egypt, both man and beast; and against all the gods of Egypt I will execute judgment: I am the Lord.

12:13 'Now the blood shall be a sign for you on the houses where you are. And when I see the blood, I will pass over you; and the plague shall not be on you to destroy you when I strike the land of Egypt.

12:14 'So this day shall be to you a memorial; and you shall keep it as a feast to the Lord throughout your generations. You shall keep it as a feast by an everlasting ordinance.

## 「代価によって奴隷から贖い出される。」 出エジプト記12章5節～14節

安い物を高く買うのは愚か者で、高い物を安く買おうとする者は、浅薄な者だと思えます。物の正当な代価を見積もるといことは、見る目を持った人ができることで、多くの経験と人格が必要です。代価や犠牲を払わずに物を得ようとするのは、育てられ方が悪いか性格が悪いかでしょうが、神をそのように利用しようとする天国には行けません。

人のいのちは尊いと言いますが、他人のいのちについては無責任なことがあります。自分のいのちについても、あまり考えないでいる人が多く、「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分のいのちを失ったら何の益があるでしょうか。そのいのちを買い戻すのに、人は何を差し出せばよいのでしょうか。」(マタイ16:26)とイエス様が論じています。

人生は信仰の試金石です。自分は信仰があると思ひ、公言しても、実際には、この世を優先して生きていくことのために働かなければならないと教会にも来ず、聖書も読まず、祈りもしていないで済ませているのです。それで神の国に入れると思うのは、人間が自己中心な存在、罪人だから、当然なのです。「いのちを買い戻す」ことは人間には不可能なことではわかってはいるはずですが、悔い改める(方向転換)ことなく、自分中心な生活をするのが人間の本性なのです。

人が救われる為には代価が必要です。十字架でイエス様が死なれたのは、ご自分のいのちを私たちのいのちの代価として犠牲にしなければならぬからなのです。「人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」(マルコ10:45)。

自分中心の生活をしていて、「私はイエス様を救い主として信じるから天国に迎え入れてください。」という願いは、自分のいのちの価値を安く見積もり過ぎていっているのです。実は、そういう自称クリスチャンが多いのです。「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。」(1コリ6:20)。その代価とはイエス・キリストです。

救いとは、自分が死に値する罪びとであることを認めて悔い改めることです。悔い改めたら救われるということの代価は、イエス様が既に私たちのいのちの身代わりに死んでくださったということなのです。そのキリストの代価を軽んじて、信じるだけで救われるということはないのです。死に値する罪びとであることを認め、この地上のいのちはキリストに買われたものであることを理解したら、勝手な生き方はできないのです。

生贄を理解できない日本人は多いでしょう。日本神話にはあつたようですが、農耕民族には生贄として献げる動物が少なかったでしょう。

日本における神意識は、集団の秩序を守る方便や手段としての存在を偶像化したものが多いようです。罰が当たるとか、一族の神社とか、仏教もそのような家制度の存続に用いられてきました。死後の世界も、みんなが死んでいくのだからしょうがないというような無情観が有つたようです。

キリスト教の唱える天国や救いも、多くの日本人には違和感があるようです。そもそも人格神という意識がないので、天国に迎えられる資格などと考えていないのです。これはアジアでも珍しいでしょうし、世界的には稀有な無神論社会です。そういう神観念によってクリスチャンも惑わされているのです。

イスラエルの人々を奴隷状態であつたエジプトから救い出すために、子羊の血を、家の門柱と鴨居に塗るといことは、その血が「滅ぼす者があなたがたの家に入って打つことのないようにされる」(12:23)印となるということです。塗っていない家の長男は、皆打たれ死にました。裁きの神としての恐ろしい顕現です。

種なしパンとは、発酵をさせないで小麦を練って焼いたものです。苦菜は現代でも肉と一緒に食べます。「腰の帯を固く締め、足に履き物をはき、手に杖を持って、急いで食べる。これは【主】への過越のいけにえである。」(二)といふことは、直ぐに旅立つといふことで、「この日は、あなたがたにとつて記念となる。あなたがたはその日を【主】への祭りとして祝い、代々守るべき永遠の掟として、これを祝わなければならない。」(三)。つまり、実際にエジプトから脱出させることと、子孫への信仰教育を兼ねた儀式的掟作りといふことです。

聖書信仰とは、このようにきちんと教えなければ身に付かず、犠牲や代価を払わなければ大事なものを得ることはできないことがわからないのです。聖書信仰が真実なものかどうかを判断するのは自分自身です。ただ、自分の基準で天国に行けると考えるのは間違っています。

現代は博愛主義の時代で、聖書も戒律的には読まず、穏やかな神の愛として捉えますが、それは人間にとつて都合の良い解釈です。ところが、神の国に受け入れるか否かは、神の判断であつて人間の都合や言い訳は通じません。原理主義として遠ざけるのが現代の風潮です。

過越の日は、イエス様が十字架に掛かつた日で、子羊イエスの血が私たちの罪を贖い、罪の奴隷であつた私たちを救ってくださいました。

この過越の7日間、種なしのパンを食べなければならず、「種入りのパンを食べる者は、みなイスラエルから断ち切られる」(12:15)といふ恐ろしい戒律をユダヤ人は命がけで守ることになります。